

前 シラチャ日本人学校（タイ）
現 美唄市立南美唄中学校
氏名 悪七 広仁

1. はじめに

シラチャはレムチャバン港の開港、大型工業団地の開発、日系自動車メーカーの進出により、アジアを代表する製造・物流の拠点として近年、急速に発展している。これにともないこの地域では日本人が急増し、今なお増え続けている。平成 21(2009)年、世界で一番新しい日本人学校、シラチャ日本人学校が誕生した。開校初年度は、教員の半数を姉妹校のバンコク日本人学校から確保し、バンコク日本人学校のノウハウを持ち込み、短期間のうちに安定した学校運営が行われたそうである。

私が赴任したのは開校から 1 年後のこと。文科省からシラチャ日本人学校に教頭職の派遣がなく、校長を除くと自分が年長であったこと、日本での勤務実績を考慮され、正式な教頭が赴任するまでの 1 年間は教頭代理として任されることになった。が、3 年間、教頭職の派遣がないまま帰国を迎えることとなった。

国際理解教育という側面では、自分で計画・推進して直接子どもに指導する機会には恵まれなかったが、他の先生方が経験できない仕事をさせていただいた。学校をつくった方々の意思を受け継ぎ、シラチャ日本人学校の礎を築くことに携わることができたのは大きな誇りであり大変貴重な経験となった。

2. タイ王国について

<概要>

- ・ 東南アジアに位置する立憲君主制国家。
- ・ 東にカンボジア、北にラオス、西にミャンマーとアンダマン海があり、南はタイランド湾とマレーシア。
- ・ 国土はインドシナ半島の中央部とマレー半島の北部に位置する。
- ・ 面積はおよそ 51 万 4 千平方キロメートルで、日本の 1.4 倍の広さ。人口はおよそ 6700 万人。
- ・ 首都はバンコク。バンコクの人口は 815 万人。周辺の人口を含めると、1500 万人ほど。
- ・ 気候…熱帯モンスーン気候。「乾季」、「雨季」、「暑季」の 3 つの季節がある。年平均気温は 28.4℃。



タイ王国とその周辺

タイ王室はタイ国民にとって誇りであり、非常に敬われている。朝 8 時と夕方 18 時には全てのテレビ局、ラジオ局、街頭で国歌が流れ、道行く人は足を止めて国歌を聴く。王室の中でも 67 年前に即位した、ラマ 9 世ことプミポン国王は国民から非常に尊敬され、親しまれている。建物、道路等には国王の肖像画が飾られ、その人気がいたるところから感じられる。

民族はタイ族が 75% を占め、華人 14%、その他マレー系、インド系、モン族、カレン族等少数民族が多数いる。公用語はタイ語である。宗教は仏教が 95%、イスラム教 4%、キリスト教 0.6% となっている。教育は日本と同じく 6・3・3・4 制。義務教育も日本と同じく小中の 9 年間。都市部を中心に教育への関心が高く、高校までは私立学校の人気が高い。一方で、大学は国立大学の人気が高い。



タイのドナルドは手を合わせている

首都バンコクを中心に、シラチャ、パタヤ、チェンマイ、プーケットなどに多くの日本人が居住しており、大使館に在留届提出済の日本人は 5 万人ほどである。また、タイに進出している日系企業は 4000 社以上といわれている。

3. シラチャについて

- ・タイの東部チョンブリ県シラチャ郡
- ・バンコクから南東に 100km
- ・スワンナプーム国際空港から南東に 80km
- ・人口は 23 万人（民間の調査による）



シラチャ付近

<漁村から日本人街へ>

平成 3 (1991) 年、シラチャの隣町にレムチャバン港が建設された。その周囲には多数の工業団地ができ、平成 9 年頃から進出する日系企業が増加した。レムチャバン港は、今ではバンコク港の貨物取扱料を超え、東南アジア有数の港に成長した。近隣のイースタンシーボード工業団地は「東洋のデトロイト」と呼ばれ、三菱、マツダ、スズキ、いすゞの日本メーカーに加え、GM も進出している。また、自動車関係のみならず、電機メーカーから食品に至るまで様々な製造業が進出している。3 年前の日本人会の資料によると、この地域の日系企業数は 400 社とも 500 社とも言われていたが、今なお新たな工業団地が拡張され、次々と日系企業が進出している。

シラチャはもともと小さな漁村だったが、15 年ほど前から日本人が住み始め、今では日本人街として発展した。大使館に在留届を出しているシラチャ在住の人の数は 4000 人程度であるが、出張者を含めると 5000 人ほどいるとも言われている。かつて、シラチャは在留する日本人のほとんどは単身赴任者だった。日本からの単身赴任に加え、家族はバンコクに在住、ご主人がシラチャに単身赴任し、週末はバンコクに帰るという方も少なくなかった。平成 21 年にシラチャ日本人学校が開校してからは、家族を帯同する人が増え、日本人向けサービス業の進出もそれまで以上に多くなった。

さらに最近では、平成 23 (2011) 年のタイ北部で起こった甚大な洪水の中、被害がなかったシラチャに生産拠点を移した日系企業や、平成 24 (2012) 年の中国での反日デモの影響で「チャイナプラス 1」の動きが加速したことで、シラチャに拠点を移す企業が続出した。

シラチャは多くの日系企業、日本人で賑わうようになった一方で、家族帯同を考えている日本人のニーズに合った安全性、部屋数を備えた住居が不足している。子どもを日本人学校に通学させることを希望する保護者の一番の悩みは住居選びのようで、中には家族帯同を断念したり、日本人学校への通学を断念する人もいる。また、増加する自動車の数に道路の拡充が追いついておらず、朝夕の渋滞は徐々に深刻な状況になりつつある。

<シラチャでの暮らし>

シラチャのスーパーや食料品店では日本食材を扱っており、さらに日本人居住地域には日本人向けの生鮮食料品の移動販売車があるので、日本食材を手に入れることは容易である。パタヤ、バンコクまで足を伸ばせば世界中の食材を手に入れることができる。日本食レストランや居酒屋はおそらく 50 店舗ほどあると思われ、日本食を食べることには事欠かない。タイで生産している日本米、豆腐や醤油などタイで製造されている日本食材は安く手に入れることができる。一方、日本から輸入している米、カレールーやチーズ、バターなどの乳製品は日本の 3 倍ほどの価格である。最近では、マックスバリュや北海道民におなじみの「ツルハドラッグ」も開店し、日本人においてはますます利便性が高まっている。

市内の移動手段はバス、3 輪タクシー、バイクタクシーがあるが、日本人学校の通勤には自家用車が不可欠である。

シラチャは海に面しており、休日にはビーチで海水浴や釣りをしている人、周辺に点在しているゴルフ場でプレーに興じる日本人の姿が見られる。

4. シラチャ日本人学校設立の経緯

<設立のきっかけ>

学校設立の実現は、チョンブリ・ラヨン日本人会の方々の熱意によるものである。チョンブリ・ラヨン日本人会はバンコクにある日本人会とは違い、当初は大使館の安全情報がチョンブリ県、ラヨン県にある日系企業に行き渡るために企業を単位として組織化されたものである。その後、タイ国日本人会や盤谷商工会議所とのパイプ役、日本人子女の教育面での支援を行ってきた。



シラチャ日本人学校の校舎

平成13年にシラチャ・パタヤ補習授業校が開校した。この時の児童・生徒数が40名。平成18(2008)年に児童・生徒数が100名を越えた。また、チョンブリ・ラヨン日本人会の調査では、バンコク日本人学校に在籍している64名の児童・生徒の保護者がシラチャ地域に進出している日系企業に勤務していることがわかった。この年、地元のチョンブリ・ラヨン日本人会において、3年後の日本人学校設立に向けて活動を開始することが議決された。

<自前の校舎の建設、そして開校に至るまで>

新校開設においては、校舎は賃借から始まるのが通例であるが、児童・生徒数の増加が見込まれ、校舎の増築、改修を臨機応変に行うために、そして校舎・施設建設に必要な寄附金募金に目処がついたことから、自前で建設することとなった。

タイ国では、学校の設置者はタイ法人・タイ人でなければならない。元々あったバンコク日本人学校の設置者は、日本とタイの友好団体である泰日協会であり、泰日協会が新校設置者として申請するのであれば、学校設立が認可されることになった。そして、泰日協会からは、バンコク日本人学校を運営していた泰日協会学校理事会がバンコク日本人学校とシラチャ日本人学校の両校を一体運営することで、新校設置者として申請することが了承された。したがって、バンコク日本人学校とシラチャ日本人学校は姉妹校という関係にある。

5. シラチャ日本人学校の概要（平成24年度）

① タイでの学校名

日本語 泰日協会学校シラチャ校

英語 THAI JAPANESE ASSOCIATION SCHOOL SRIRACHA



航空写真による校舎全景

② ステータス

タイ国私立学校（日本国文部科学省在外教育施設認定校）

③ 設置機関 泰日協会（会長：Mrs. Kobkarn Wattanavrangkul）

④ 運営責任者 泰日協会学校理事会



グラウンドから見た校舎

⑤ 敷地・校舎・施設

・敷地面積 20 ライ（32000 m² ライ：タイで用いられる面積単位 1 ライ＝1600 m²）

- ・校舎面積 4138.86㎡
- ・施設 普通教室12 特別教室7（理科室、音楽室、技術科室
家庭科室、ITルーム、英会話室1、英会話室2）
体育館（冷房完備 1072㎡） プール（300㎡）
1周200mのトラックがあるグラウンド
- ・治安・安全 24時間体制で警備員常駐、CCTVカメラシステムで監視・
記録カメラは敷地内に15台配置



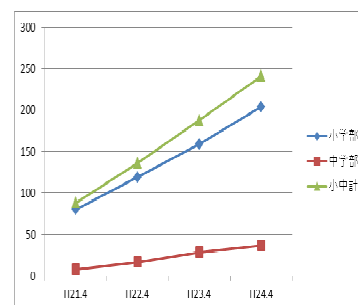
普通教室

学校設立にかかったお金の総額は2億バツである。そのうち、校舎建設費用は約1.5億バツ（当時 1バツ＝約3円）。校舎建設費用のおよそ4割は日本政府からの援助を受け、4割は寄附金、残りは自己資金が充てられた。

なお、児童・生徒数の増加にともない教室が不足することが見込まれたので、平成23年7月より校舎増設に向けて準備を始めた。平成24(2012)年12月に校舎増設工事が着工。新校舎は普通教室12、特別教室2、1階2階吹き抜けの講堂、器具庫、更衣室を備え、平成26年4月の供用開始を目指して建設中である。

⑥児童・生徒数・学級数の推移（4月度で比較）

	小学部			中学部			小中計		
	人数	増減	学級数	人数	増減	学級数	人数	増減	学級数
H21	80名		6	8名		3	88名		9
H22	119名	+39	6	17名	+9	3	136名	+48	9
H23	159名	+40	7	29名	+12	3	188名	+52	10
H24	204名	+45	9	37名	+12	3	241名	+57	12



平成22年度 全校児童・生徒



平成23年度 全校児童・生徒



平成24年度 全校児童・生徒

⑦児童・生徒数および学級編成 12学級 259名（平成25年2月15日現在）

<内訳>

学年	小学部							中学部				全校
	1	2	3	4	5	6	小計	1	2	3	小計	合計
学級数	2	2	1	1	2	1	9	1	1	1	3	12
在籍数	54	44	30	35	38	25	226	19	10	4	33	259
男子	26	23	14	13	21	13	110	4	3	2	9	119
女子	28	21	16	22	17	12	116	15	7	2	24	140

児童・生徒数は毎年およそ 50～60 名の増加で推移している。年度途中に学級編成を変えないよう、編入希望者の動向や過去の増加の傾向を分析しながら、毎年、次年度の学級編成にあたった。また、校舎増設においては、校舎の規模を決めるための基礎資料づくりのため、様々な情報収集をも行った。

⑧居住エリアと通学方法

- ・居住エリア 9割の児童・生徒がシラチャ市内から通学（通学バスでおよそ 20～30 分）
1割はパタヤ（通学バスで 30 分～60 分）および近郊の一軒家（5～30 分）
- ・通学方法 9割の児童・生徒が通学バスを利用（MONTRI 社に運行委託）
1割は自家用車による送迎

⑨職員構成

校長を含めた日本人教員 18 名、日本語が話せるタイ人ディレクター1名、タイ語教員 1 名。事務長はバンコク日本人学校と兼務、事務職員は 2 名。非常勤の英会話スタッフ 2 名、水泳コーチ 1 名。用務員 4 名、校用車の運転手 3 名。

6. シラチャ日本人学校の特色・特徴

①タイ語

全学年で週 1 回行っている。タイでの生活に必要な単語や会話や現地校との交流会で使う言葉とともに、タイの文化、習慣をも学習する。小 1, 2 は標準時数の他に授業を行い、小 3 以上は総合的な学習の時間の中で行っている。

②英会話

ネイティブスピーカーにより小 3 以上で週 2 回行っている。各学年と 2 つの能力別クラスに分けている。小 3, 4 は標準時数の他にいき、小 5, 6 は 1 コマを外国語活動として、もう 1 コマを標準時数の他にしている。中学部は 1 コマを通常の英語の授業を T.T. としていき、もう 1 コマを標準時数の他にしている。

③朝読書・図書室の充実

朝読書は年間を通じて毎日 10 分行っている。図書室の充実にも学校として力を入れ、蔵書数は平成 25 年 3 月現在で 9000 冊あまり。全校児童・生徒数からすると、充実していえよう。図書委員の児童生徒の活動に加え、図書ボランティアの保護者の方々も毎日来校し、貸し出し、蔵書整理、読み聞かせなどを行ってくださっている。

④小 5 臨海学校

2 泊 3 日で行われる。メインは 2 日目に行われる遠泳で、日頃の水泳学習の成果を発揮する。平泳ぎで 500m または 1000m を泳ぎ切ることで大きな達成感を味わい、児童はひと回りもふた回りも成長する大切な行事である。

⑤ 修学旅行

小6の行き先はタイ北部の古都チェンマイ。タイ北部の歴史と伝統を学ぶとともに、現地校との交流会を行う。中2の行き先はマレーシア。隣国でありながらタイとは文化や宗教が大きく異なり、生徒は視野を広げて帰ってくる。

⑥ 土曜登校日

月1回の全校登校日と、もう1回の小6中3登校日がある。土曜登校を行う目的は、授業時数の確保、土曜日に行事や授業参観を行うことで父親の子育て参加に寄与すること、である。

⑦ 現地理解学習

校外学習は、各学年ともに年間2～3回程度行っている。タイの企業や施設、日系企業ともに日本人学校の校外学習受け入れは大変積極的である。行き先の新規発掘、実踏を重ね、年々充実したものとなっている。

現地校との交流は、小学部で1回、中学部で1回、そして小6の修学旅行で行っている。シラチャ日本人学校では、「言葉での交流」「1対1の交流」をキーワードとして、交流会を企画している。

言葉が通じにくい相手に何とか自分の意志を伝えようとしたり、相手が自分に伝えようとしていることを理解しようとしたり、初対面の人に対して積極的に交流することこそが、国際社会に生きる者としての素養を育むと考え、上記キーワードを設定している。そこで交流先の学校に対しては、本校同じ人数になるよう調整を図っていただいた。また、事前に顔写真と名前を双方の学校で交換し、誰と交流するのかを決め、交流開始からすぐに子どもたちが活動できるような工夫も行った。

さらに、PTAの国際ボランティアに登録している国際結婚家庭の保護者を活用することにも取り組んだ。国際ボランティアの方々が交流のアシストをすることで活動が活発になる場面がいくつもあり、現地校との交流に欠かせない存在となった。



現地校との交流会 1対1を重視した交流

⑧ 下校集会

週1回、帰りの会終了後、下校バス出発までの時間を使い、教員が交代で15分ずつ子どもたちに話をする。テーマは主に出身地のこと、自分の趣味や興味があること、人生経験等が多い。多様な教員が全国各地から集まり、各地の話を聞くことができるのは日本人学校ならではのことで、子どもたちの興味や視野を広げる一助となることをねらいとしている。

7. 保護者との協同 自助努力の促進

学校がなかったところに学校ができた。日本人の子どもがシラチャで安心して学校に通うことができるようになった。その光景はあたりまえのようだが、学校の開校は簡単なことではなかった。海外では、誰かが学校をつくってくれるのではなく、学校を必要とする人の自助努力が必要である。開校に携わった方々や保護者はここに学校があることが「あたりまえ」ではなく「有難い」ことをよく理解している。

子ども、保護者、先生が入れ替わると、「有難い」学校が、いつの日か「あってあたりまえ」の学校になることは避けられない。学校への要求も増えることも予想される。しかし、幸いにも自分が深く関わったPTA活動の中で、保護者の自治意識が醸成されるような通学バスの乗車指導、保護者の自助努力による英検の実施が実現したので、下記にその事例を記す。

① バス乗り込み観察の実施

シラチャ日本人学校の生徒指導の多くは、小学部児童の通学バス内のトラブルやマナーの悪さだった。学校としては予防と問題の再発防止につとめていたが、保護者の協力が不可欠と判断し、それまで教員が行っていた年3回のバス乗り込み指導のうち2回を保護者による「バス乗り込み観察」にしてはどうかとPTAに提案した。実際にバス内の様子を見て、どのような指導が必要かを保護者にも考えていただき、学校だけでなく、家庭でも乗車マナーの啓発をして



PTAによるバス乗り込み観察の実施

いただくというものである。また、その企画・運営をPTAでやってもらうことも合わせて提案した。提案は了承され、保護者によるバス乗り込み観察が行われることになった。実施前には保護者対象の説明会を実施したが、乗り込み観察をするだけで成果が出せるのか？といった厳しい意見もあった。実施後は「バス内の様子がわかった」「このような機会を増やしたほうが良い」など、肯定的な意見が非常に多く出された。バス運行に対する保護者の自治意識の向上が図られ、バス内のトラブルは減少した。

②英検の実施

これまで、シラチャの子どもたちが英検を受けるためには、手続きが複雑で、1時間半かけてバンコクに行かなければならなかった。そのせいか、受験者は毎回、3～5名程度にとどまっていた。

そこで、「シラチャ日本人学校を会場、PTAが主体となって実施できないか？」と、PTA三役に相談を持ちかけたところ、賛同を得て実施に向けて動き出した。総務と試験監督はPTAが、学校の開錠と施錠は学校の担当者である私が、当日の受付業務と会場設営は受験者の保護者が、というように役割分担をし、本年1月、準備から半年余りでシラチャ日本人学校にて初めての英検を実施した。このときの受験者は42名。受験生にとっては利便性が格段に向上したようである。運営に携わったPTAの方々も大きな達成感を味わっており、PTA主体での英検実施は大きな意義があるものとなった。

2次試験実施においては、バンコクの英検担当の方より「面接官の確保」が人材的にも金銭的にも大変だと聞いていた。初回のシラチャ開催においては、2次試験の面接官をシラチャ日本人学校の英語教員が行った。しかし、「自助努力」ということで保護者の中から人材発掘をすることになり募集をかけたところ、平成25年度は5名の方が協力すると申し出てくださった。安定的に英検を実施できる見通しがついた。

8. 治安・安全に関するできごと

① 2010年4月5日 バンコク騒乱

3月下旬に政府と反独裁民主戦線（UDD）の直接交渉が決裂して騒乱が始まった。タイに向けて出発したのは4月6日のことである。

赴任後、バンコクでの各種行事は延期となり、首都バンコクに常事態宣言が出されたことで、シラチャ日本人学校の教職員はバンコクへ行くことを禁止された。

5月に入り、バンコク日本人学校は1週間の休校。シラチャ日本人学校は休校にはならなかったが、騒乱は徐々に地方にも広がった。シラチャ日本人学校で年に1回行う緊急一斉下校訓練をしたその日の夜、奇しくもシラチャ日本人学校があるチョンブリ県にも非常事態宣言が出され、夜間の外出が禁止となった。19日に政府がデモ隊を強制排除して、およそ2ヶ月にわたった騒乱は収束した。



緊急一斉下校訓練の様子

②2011年タイ中北部の洪水 ～ バンコク日本人学校から一時編入42名の受け入れ

タイ北部で発生した洪水は10～11月に首都バンコクに接近し、バンコク日本人学校は1ヶ月間休校となった。休校の間、2000人以上の児童生徒は一時帰国したが、姉妹校であるシラチャ日本人学校に通学できないかという問い合わせが、5日間で200件以上あった。一時編入希望の殺到が予想されたので理事会では一時的な受入条件を設定した。結果として42名の児童生徒を受け入れた。運動会直前だったが、できるだけ参加できるようにし、バンコクから来た子どもたちの不安が少しでも解消されるよう配慮がなされた。

バンコク日本人学校が再開し、シラチャ日本人学校を去ることになった子どもたちからは、安堵感とともに名残惜しさが感じられた。日本人学校とバンコク日本人学校は姉妹校とはいえ、両校の子ども同士が顔を合わせる機会はない。一時編入してきた子どもたちはシラチャ日本人学校での良き思い出をバンコク日本人学校で語り、最初で最後の両校のかけはしとなっていたようである。

9. 最後に

シラチャ日本人学校は開校間もないので、学校内の組織の整備、新しい企画や行事を考える機会に数多く恵まれた。同僚の先生とともに議論して決めたことや自分で出したアイデアが次々と形になっていくのを目の当たりにして、今まで味わったことのない快感のようなものを感じた。一方で、最初にボタンをかけ違えてはいけないという大きなプレッシャーもあった。

帰国して半年が経ったが、シラチャ日本人学校の先生方からメールで学校の様子などを聞くと、シラチャ日本人学校の礎を築くことに自分がいくらか貢献できたのではないかと感じ、ほっとしている。

タイは親日的な国で、日本人に対してとても親切であり、我々のことを大事にしてくれる人が多い。派遣期間中に日本では未曾有の東日本大震災が起こった。タイのデパートや街角では、復興のための義援金を募ってくださる方を数多く見かけ、学校のスタッフや知り合いのタイ人の人々も、心配して親身に話しかけてきてくれた。外国の方々が日本や私たちのことをこれほどまでに心配してくれたことに目頭が熱くなった。

日本人学校では編入相談も大きな仕事の一つだった。シラチャ日本人学校に入学を希望する子ども、全員の保護者と面談を行ったが、どうしても編入を断らなければならないケースもいくつかあった。その度に、日本で普通に義務教育を受けられることがどれだけ幸せなことか、日本人学校に通学し、海外にいながら日本の義務教育と同等の教育を受けられることはどれほど有り難いことか、と感じた。

学校の事情で教頭代理として3年間勤務したが、保護者や子どもにとっては教頭先生である。代理であるという甘えは許されない。同期がいればいろいろと相談しやすかったのだろうが、平成22年度の派遣教員は自分1人だった。自分より1年早く派遣されていた先生方は、まるで同期のように接してくれてとても心強かった。また、オリンピックセンターでの内定者研修ではバンコク日本人学校の先生方が仲間に入れてくれた。タイに行ってから公私ともに深くおつきあいを続け、姉妹校としてのつながりは他のどの年次よりも強かったであろう。さらに、シラチャ日本人学校の校長の出身は函館、事務長は札幌、ということによって公私ともに大変親切にいただいた。

慣れない仕事の連続だったが、3年間、思い切り仕事に打ち込むことができ、清々しい気持ちで帰国することができた。素晴らしい上司と仲間、自分を支えてくれた家族のおかげだと思い、心から感謝している。